

(第十五章)

本性が有ることの理由を否定する>因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する>

[章の著述を説く]

言う。「君は事物が有ることを認識しない故に、これらの事物は自性が無いのであると思ひ、『諸事物は縁起生である』とも主張するが、『諸事物は自性が無い』とも言うならば、如何様に、事物は起こったのでもありながら無自性であるともなろうか。もし、諸々の因縁より諸事物の自性のみが起こらないならば、それより他の何が起こるとなろうか。もし、因である織糸より絨毯の自性のみが起こらなければ、因である織糸の自性のみが起こるのか？もし何も起こらないならば、『起こる』とも、如何なる言葉で述べるのか。」

章の著述を説く>諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることの理由を否定する>本義>

[本性に因縁は必要なく、矛盾すると示す]

説く。何？君はまさしく馬に乗りながら、馬が見えないのか？君は『諸事物は縁起生である』とも言うが、それらは何の自性が無いか自体も見えていない。それは先ず、粗雑な心によっても安易に知るとなるだろう。

自性が、因縁より、
起こるとは正理ではない。

ここで「私の事物」を「自性」といい、私の事物が有るものは、再度諸々の因や縁から起こることは正しくない。このように、存在するものに如何なる再度の（起こる）行為が有ろうか。行為が無ければ、諸々の因や縁が何をしようか。もし、それが諸々の因と縁より起こるならば、そう見れば、

因と縁より起こった、
自性は所作となる。 1

それも不合理である。

言う。「自性とは所作のみである。何故かといえば、このように、以前に起こっていない絨毯の事物を後に為す故である。」

説く。

自性は所作であると、
如何様であれば適するとなろうか。

「自性は所作である」と如何すれば適するとなろうか。
それらの意味は、一致しない否定であり、もし自性であるならば所作ではないが、仮に所作であるならば自性ではない時、「自性でもあるが所作でもある。」と、心ある者の誰がそのように捉えようか。

本義> [自説における本性の定義を示す]

言う。「君は、自性が如何なる正理を具えると思うのか。」

説く。

自性とは作られたものではなく、
他に相互関係が無いものである。 2

行為によって成立させられるとならないものと、因と縁にも相互関係したとならない、自らの自性が変化することなく入るそれが、自性として正しいのである。行為によって成立させられるものと、因と縁にも相互関係したとなるものは他に頼る故に、他に相互関係したものは自らの我性として良く成立していないものであるので、「自性」として如何様に合理となろうか。

本性として有ることの理由を否定する> [それによって他の三極辺を否定したと示す]

言う。「何かに対峙してそれが事物となる他の事物とは、先ず有る。他の事物が良く成立したならば、自性も良く成立するだろう。」

説く。対治に依拠しても自性は不合理である。何故かといえば、他の事物が不合理である故であり、

自性が有るのでなければ、
他である事物が何処に有ろうか。

もし、自性が良く成立したとなれば、然ればその対治である他の事物も有るとなるものであるが、自性とは不合理であり、自性が有るのでなければ他の事物が何処に有ろうか。それは、他の事物が無ければ、その対治である自性が合理であると何処でなろうか。

また他にも、自性も他であるが、他の事物も他ではない。何故かといえば、このように、

他である事物の自性が、
「他の事物である」と述べられる。 3

このように、他の事物の自性であるものが「他の事物」と述べられたので、それ故に、もし、その他の事物の自性が無いのみであるならば、何によってそれが有るとなろうか。それ故に、「自性も他であるが、他の事物も他である」とは不合理である。そう見れば、対治そのものは無い。(何故ならば) まさしく同一である故である。対治が無ければ、如何様に対治に依拠して成立するとなろうか。

言う。「『事物の自性は有る。』『無い。』というこれが、吾輩に何をしようか。先ず、事物は有る。」

説く。

自性と他の事物
以外に、事物が何処に有ろうか。
自性と他の事物が
有るならば、事物が成立するとなる。 4

もし、幾らかの事物が有るとなれば、自性か他の事物の何れか？と問う。それ故に、自性と他の事物が有るならば事物が成立するとなるが、自性も無いが他の事物も無い時、自性と他の事物以外の、(言葉で) 述べられるものではない自にも他にもならない単一のその事物が有ると、何処でなろうか。

言う。「そう見れば、諸事物の無事物は有る。(何故ならば) 無事物も相互関係しておらずに為すので、何かの無事物となる事物も有る。」

説く。そう見るとしても、事物が良く成立することは不合理である。何故かといえば、無事物が良く成立していない故であり、

「自性と他の事物以外に、事物が何処に有ろうか。」
と既に言った。それ故に、

もし、事物が成立していなければ、
無事物が成立するとはならない。

「もし、事物そのものが何も良く成立していなければ、無事物はまさしく成立するとならない。」とまさしく言ったのではないか？何故かといえば、

他に変化する事物は、
無事物であると、人は言う。 5

このように、「他に変化するものであるその事物は、無事物である。」と人々は言うが、その事物も無い。それが無ければ、その無事物は何のものであるとなろうか。無事物が（無ければ）、君のその対治となる事物が合理であると何処でなろうか。

本性として有ることの理由を否定する＞ [否定した意味であるという見解を叱責する]

言う。「ここで『真如を見ることによって、解脱するだろう。』といい、『真如』というものも、その事物が真如（それのみ）であり、『事物の自性』という主旨である。そこでもし、事物の自性がまさしく無いのであれば、そう見れば君にとって、真如を見ることは不合理になるのではないか？真如を見ることが無ければ、解脱が合理であると如何様になろうか。そう見るので、『諸事物は自性が無い』というその見解は、善良ではない。」

説く。誤って捉えるな。

事物そのものと他の事物や、
事物と無事物そのものであると見る
者達は、仏陀の教えに、
真如を見るのではない。 6

そのように、自性と他の事物や、無事物そのものと見るそれらの見解は、このようにも最高に深甚な仏陀の教えに、真如を見るのではない。我々は、縁起生という太陽が現れることによって明るみに出た諸事物の無自性そのものを正しくあるがままに見るので、それ故に、まさしく我々には真如を見ることが有るので、我々のみにおいて解脱も理に適う。

諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることに批判を示す> [経証による批判]

もし、「それは何故か」といえば、このように、

世尊は事物と無事物を、
示すことによって、カタヤナの
教誨で、有と
無の双方をも否定された。 7

何故ならば、勝義¹の真如に通暁する世尊が事物と無事物を良く示すことによつて、『迦旃延²への教誨』という経典で、「有」というものと「無」という双方とも否定された故に、諸事物を有性（実在）や無性（虚無）と見なす者達は真如を見ないので、まさしく彼らにとつても解脱は不合理である。有性（実在）と無性（虚無）に頭かに執すること無く、世俗名称を付けた我々においては、不合理は無い。

もし、事物と無事物であると見ることが真如を見ることであれば、真如において見ていないことが全く無くなるので、それは、「のみ」ではない（真如ではない）。そう見れば、諸事物の無自性そのものとは真如であるが、それを見ることのみによつて解脱することになり、阿闍梨聖提婆も、

「有（輪廻）の種子とは識であり、諸対象はその享受対象である。対象に無我を見るならば、有（輪廻）の種子は滅すとなる。」³
と説かれた。それは、そのように確かであるのみと知りたまえ。

諸事物が本性として有ることを否定する>本性として有ることに批判を示す> [理証による批判]

そうでなければ、

もし、本性が有性であれば、
それは、無性にはならない。

もし諸事物が本性としてまさしく有であるとなれば、本性として有る有性は、後に無性にはならない。何故かといえ、このように、

本性が他に変化することは、
いつ時にも合理とはならない。 8

¹ 勝義^{しやうぎ}：聖なる真実。世俗の真実に対する。

² 迦旃延^{かせんねん}：Kātyāyana 釈尊の十大弟子の一人。

³ 「有・・・となる。」：『四百論』第 14 章 25 偈。

このように、変化する対治（相対物）とは本性であるので、それ故に、本性とは変化せずに恒常であるとなる類であるが、諸事物においては他に変わると映るので、それ故に、それらにおいてまさしく自性として有ることは不合理である。

ここで言う。「仮に、事物が無いと見るより諸事物の自性は有るのではないと納得したので、先ず、諸事物の無事物であるとなったのである。」

説く。

本性が有るのでなければ、
他に変わるとは、何のものであろうか。

諸事物において「有性は本性として無い。」と言った時、諸事物の有性は本性が有るのでなければ、その「他への変化そのもの」は、何のものであるとなろうか。

言う。「もし、諸事物の無事物は映るけれど、本性も有るのでなければ無事物とは不合理である。何かの事物が無くなる（無事物になる）という『事物の本性』は、疑いなくまさしく有るのである。」

説く。

本性が有るのであろうと、
他への変化が、如何にして適おうか。 9

前述でも、

「本性が他に変わるとは、いつ時にも合理とはならない。⁴このように、変化する対治（相対物）とは本性であるので、それ故に、本性とは変化せずに恒常であるとなる類であるが」と説いていないか？それ故に、諸事物の無性も不合理である。

章の著述を説く > [本性として有ると言えば、辺執を超えないと示す]

諸事物を有性や無性であるとする見解に対して、この他の過失としても背理となり、

⁴ 「本性が…ならない。」：『根本中論』第 15 章 8 偈後 2 行。

有るとは恒常であると捉える。
 無いとは断滅と見る。
 それ故に有と無に、
 賢者は留まることをするな。 10

「事物は有る。」と事物を見る見解においては恒常であると捉える背理となるが、「事物は無い。」と無を見る見解においては断滅であると見る背理となるので、その二つとも無意義であり、害するとなるものである。それ故に、有性・無性と見れば、恒常と断滅であると見る背理になるので、それも無意義で害するとなるので、それ故に、真如を了解しようと欲し、輪廻の閑所より抜け出ようと望む賢者は、有性と無性に留まることをするな。

言う。「有性や無性であると見れば、如何様に常見（実在視）と断見（虚無見）の過失の背理となるのか。」

説く。

自性として有る何か。
 それは無ではないので、恒常である。
 以前に起こったものが現在に無いという。
 然れば、断滅の背理となる。 11

このように、自性として有る何かは後にまさしく無いとは不合理である。本性は変化しないので、それ故にまさしく有ると見ることより、恒常と見る（実在視する）となる。「その事物が以前に起こり、現在に無い。」と、有る事物について壊れると見る見解によっては、断滅と見る（虚無見）となる。

そのように、何故ならば諸事物に有性と無性を見ることは多くの過失となる故に、「諸事物は自性が無い」と言うそれは、真如を見る一中の道であるが、まさしくそれが勝義を成立するのである。

因縁を我所（我がもの）とすることが、本性として有ることを否定する＞ [章の名を示す]

「事物と無事物を考察する」という、第十五章である。